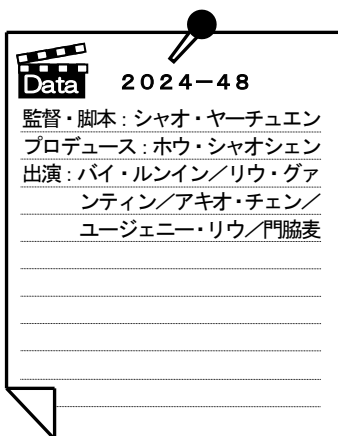




👁️👁️ みどころ

ホウ・シャオシェン監督は台湾を代表する監督だが、彼の下で助監督を長年務めたシャオ・ヤーチュエンが、1990年に起きた台湾史上最大の集団的な経済犯罪の“実話”を基に脚本を書き、監督した本作は実に興味深い。

原題と英題だけでは「老狐狸」だけが主人公と誤解する恐れがあるから、『11歳の選択』というサブタイトルを付けた邦題は秀逸。本作については、原題 vs 英題 vs 邦題をしっかりと対比することが不可欠だ。

貧乏から這い上がるにはどんな手段が有効なの？勝ち組 vs 負け組と二分する老狐狸の“二分法”をあなたはどうか考える？そして、この老狐狸から学んだことをしっかり実践した“11歳の少年の選択”をどうか考える？

世界中が混乱し、明日の政治情勢すら見えない現在の日本にも11歳の少年はたくさんいるが、さて彼らの選択は・・・？

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■台湾にも株投資のバブルとその崩壊が！■

日本では、1980年代後半に不動産投資を中心とした土地バブルが発生した。そのため、不動産取引の届出制等の法的対策が取られたが効果がなく、土地基本法の制定まで進んだ。しかし、それでもなお効果がなかったところ、金融機関による不動産融資の総量規制によって、一気に土地バブルが崩壊した。つまり、総量規制によって一部の不動産取引が止まると、次々と連鎖し、最初は住宅金融向けの銀行である住専が倒産し、その後次々と金融機関が倒れ、不動産バブルが崩壊したわけだ。また、不動産バブルと共に加熱したのが株式投資とゴルフ会員権への投資だったが、不動産バブル崩壊と共にこの両者も崩壊。日経平均株価は、最高4万円から約8,000円にまで下落してしまったし、ゴルフ場は次々と倒産、ゴルフ会員権も暴落してしまった。

これは、日本特有の現象？いやいや、それは台湾でも！！その事実は、ぼんやり知っていたが、本作を見て、それをハッキリ認識することに。日本のバブル時代は、台湾ではハウ・シャオシェン（侯孝賢）監督の『悲情城市』（1989年）（『シネマ 17』350頁）で描かれた1987年の戒厳令解除の時代だ。しかし、そんな台湾でも、1987年以降は投資ブームが起き、多くの庶民が株を購入していたらしい。そして1990年代には、好調な経済を背景に株価が急騰して、金持ちが多く出現したが、その直後あっという間に株は暴落してしまったようだ。

ハウ・シャオシェン監督の下で、長年助監督を務めてきたシャオ・ヤーチュエン監督は、大学時代に体験したそんな時代背景と、1990年に実際に起きた台湾で有名な経済犯罪事件「鴻源事件」を元に本作の脚本を書き、監督を務めることに。しかし、原題を『老狐狸』、英題を『OLD FOX』、そして邦題を『オールド・フォックス、11歳の選択』とした本作のテーマは一体何？

■主人公は11歳の少年！彼の夢は？時代の流れは？■

11歳といえば、小学校5～6年生頃だ。私は今でも小学校5～6年生当時のさまざまな断片的な記憶が残っているが、本作の主人公リャオジェ（パイ・ルンイン）のような、明確な1つの夢を持ったことはなかった。それは、父親が自己所有の土地建物を持ち、貧乏ながらも安定した家族4人の生活を営むことができていたからだろう。私は1949（昭和24）年生まれだから、11歳の時は1960年。後に、世の中は「60年安保闘争」で大変な「政治の季節」だったことを知ったが、松山市の小学校で5～6年生だった私にはそれは何の関係もないことだった。学校の成績はいつもトップだったし、音楽部での楽しい合宿や、放送部での毎日の忙しい“任務”への従事など、楽しい思い出がいっぱい残っている。

それに対して、本作のリャオジェは、どうやら小さい時に母親を亡くしたらしい。そのため、1989年の今は、台北郊外のレストランで給仕長を務める父タイライ（リウ・グァンティン）と借屋で2人暮らしを続けていた。彼と父親の夢は「自分たちの家を買って、亡き母の願いだった理髪店を開くこと」。そのため、父子は日々節約に励んでコツコツと貯金をしていたが、一体父親の給料はHow much？また毎月の貯金はHow much？そして、店舗付き住宅を買うのに、いくらかかるの？タイライはリャオジェに対して「あと3年もすれば家を買える」と言っていたが、1987年に戒厳令が解除され、民主化、自由化が進もうとしている台湾での経済的变化は？その中で貨幣価値の変動は？

毎月コツコツと貯金して店舗付き住宅の購入を計画しているタイライの頭の中に、「株を買う」という発想が無かったのは当然。それは、私の父親も同じだった。日本は1956年の経済白書で政府が宣言した「もはや戦後ではない」とのフレーズが強烈だったし、池田勇人元総理が打ち出した「所得倍增政策」によって高度経済成長の波に乗る中でインフレが進んでいったが、さて、台湾では・・・？

■□■原題 vs 英題 vs 邦題。その意味をしっかりと！■□■

「フォックス」の英語の綴りは Fox で、これがキツネを意味することは中学生レベルの英語力があればわかる。したがって、「オールド フォックス (Old Fox)」とは古いキツネだが、その意味は？

武田鉄矢のマルちゃんのコマーシャルでは「赤いきつねと緑のためき」のフレーズが有名だが、日本人におけるキツネやタヌキの愛好度は？「取らぬ狸の皮算用」や「キツネのようにずる賢い」等の日本語の表現を考えると、キツネもタヌキもあまりいいイメージは持たれていないようだ。もっとも、キタキツネは日本人に広く愛されているし、童謡『証城寺の狸囃子』のように、子供から愛されるタヌキもいる。

他方、中国語でタヌキは狸 (lí) (または貉 (hé))、ヤマネコは狸子 (lízǐ)、ビーバーは河狸 (hélí) だ。また、キツネは狐 (hú) (または狐狸 (húli))、ギンギツネは银狐 (yínhú) だ。しかして、本作の原題とされている「老狐狸」とは？これを英訳すれば「Old Fox」になるのだろうが、英語の“Old”や日本語の“老”と、中国語の“老 (lǎo)”はかなり意味が違っている。例えば、中国語では“老師 (lǎoshī)”が有名だが、その日本語訳を「老人の先生」とすればそれは誤りで、「尊敬できる先生」とでも訳すべきものだ。従って、「老狐狸」という中国語には、日本語の「古狸」的なニュアンスも含まれているだろうが、それ以上に“尊敬すべき (老練な) 知恵者”のような意味が含まれている、と私は考えている。そう考えてこそ、本作で「Old Fox」と称されているシャ社長 (アキオ・チェン) の圧倒的な存在感が実感できるし、『11 歳の選択』というサブタイトルをつけた邦題の意味も理解できるというものだ。

■□■老狐狸の“二分法”の是非は？賛否は？■□■

本作では妻を亡くした後、妻の夢であった理髪店付住宅を買うために、必死に働くタイライの姿が描かれるが、そこではタイライの生真面目さや善良さが目立っている。そのため、彼が毎月家賃の集金に来る“きれいなお姉さん”ことリン (ユージェニー・リウ) に気に入られていることは一目瞭然だが、そこで私は 1980 年代後半の台湾で、家賃が銀行振込でなかったことにビックリ！日本では 1980 年代後半の土地バブルの時代は、借家人の明け渡しを巡って家主 vs 借家人間に対立状態があちこちに生じたが、日本では「借地借家法」という法律があったため、地主・家主よりも借地・借家人の権利が強く保障されていた。台湾がそうでなかったことは、後のストーリー展開で見えてくるが、毎月の現金での家賃取り立て風景を見ていると、あの時代の台湾の家主 vs 借家人間の“人情味”が、よく伝わってくる。とりわけ、タイライが風邪をひいて熱を出している時の、リンが部屋の中に入り込んでの看病など、日本では到底考えられない風景だ。

タイライの生き方は誠実そのものだが、“きれいなお姉さん”の雇い主であるシャ社長の「二分法」によると、どうやら彼は“負け組”になるらしい。それに対して、株で儲けたお金をタイライが家を買うための頭金として貸してやるというタイライの叔父さんは、シ

ヤ社長の二分法によれば、一時的にでも“勝ち組”だ。

台湾は狭い国だから、大型のアメ車は似合わないが、それでも貧乏の中から這い上がって“勝ち組”になって、今や大邸宅に住み、多くの賃料収入も得ている「Old Fox」と呼ばれるシャ社長が運転手付きの巨大なアメ車の後部座席に座っていると、その姿は実にサマになっている。リャオジエはそんな車にも Old Fox にも縁もゆかりもなかったが、ある日、いじめっこにいじめられ、雨の中で一人座っているところを車の中に招き入れられると、意外にもこの 2 人は“いい仲”になっていくことに。その理由は、シャ社長がリャオジエの中に昔の貧しかった少年時代の自分の姿を投影したことと、逆にリャオジエが真面目なだけで“負け組”になっている父親とは異質の、“勝ち組”たる老狐狸の魅力を子供ながらに理解したためだ。

愛する息子に反発され、結果的に息子を失ってしまったシャ社長は、世の中の不平等を怒る 11 歳のリャオジエに対して「他人を思いやるな」と教え、「相手への同情を断つ方法」を教え込んだが、さて、その是非は？そしてリャオジエの受け止め方は？子供心に自分を気に入ってくれていると直感したリャオジエは、ある日、意を決して「家売って！」とシャ社長に懇願したが、その返事は無情にも「それは別の話だ」というもの。それはシャ社長にとって当然の理屈だが、リャオジエはそれをどこまで理解？どこまで反発？しかし、あなたの「老狐狸」の二分法に対する是非は？賛否は？

■□■女優・門脇麦の存在感とその役柄をどう考える？■□■

本作は台湾映画だが、日本人女優・門脇麦がタイライの初恋の女性の台湾人ヤンジュンメイの役に登場しているので、それにも注目！私が女優・門脇麦をはじめて見たのは、彼女がデビュー作として主演した『愛の渦』（14 年）（『シネマ 32』未掲載）を観た時だ。同作での彼女は、「地味で真面目そうな容姿ながら、誰よりも性欲が強い女子大生の女 1」の役だった。同作への私の評価は星 3 つと低かったが、「当初会話にほとんど入れなかったメガネの女子大生が、セックスの最中にすごい声を上げ続けること」にビックリ！同作で第 88 回キネマ旬報ベスト・テン新人女優賞を受賞した彼女の、その後の演技派美人女優としての成長は順調そのもので、彼女のある出演作品を見たシャオ監督が彼女を起用したいと言ったため、本作への登場となったらしい。彼女はもともとアジア映画が大好きだったそうだが、もちろん台湾人の役で中国語を喋るのは初めて。しかし、言葉の壁を乗り越えた上での見事な演技は、さすが門脇麦という存在感がある。

もっとも、本作での出番は少なく、タイライの“初恋の女性”としてタイライが働くレストランの客として登場するシーンと、今は有力者の妻（ヤクザの情婦？）になっているらしいヤンジュンメイが、結局捨てられてしまうシーンで登場するだけだ。それはそれとして、短いけれども納得できるシークエンスだが、傷ついたヤンジュンメイがタイライとキスを交わすシーンは一体ナニ？私はまさか？と思いながらこのシーンを見ていたが、はっきり言ってこれは余分だったのでは・・・？

■家を買える！そんな現実も、この一言でおじゃんに！■

日本で1989年をピークに発生した、土地バブル、株バブル、ゴルフ会員権バブルは倒産問題をはじめとするさまざまな人間ドラマを生み出したが、それはその5年後の台湾でも同じだったらしい。“老狐狸”の借家人で借家で店舗を営んでいたリイ夫妻は株で大儲けをしていたが、数年後ストップ安になると、さあ大変。株の大暴落を知って夫が自殺してしまったから、さらに大変だ。

バブル経済の崩壊に伴ってリャオジエの周辺にもさまざまな変化が起きることに。リャオジエが盗み聞きしたある情報を老狐狸に伝えたことによって、“きれいなお姉さん”の裏切りを知った老狐狸が、彼女を追い出してしまったことも変化の1つだ。台湾の経済が大きく揺れ動く中で、老狐狸から勝ち組 vs 負け組の二分法を教わり、さらに情報の大切さを学んだリャオジエが、老狐狸から得た「いじめっこの母親が職場で売春をしている」との情報をうまく活用していじめっこたちを“制圧”したのもその変化の1つだ。

そんな風に急速に成長してきた(?)リャオジエから、しつこく「家を売って！」と迫られた老狐狸は、夫が自殺してしたため“事故物件”になってしまったリイ夫妻の店舗付き住宅を事故物件価格で「売ってやる」と約束してくれたから、リャオジエは大喜び。早速これを父親に伝え、父子共に夢が叶えられたことを祝っていたが、老狐狸はリャオジエと約束した直後にリイの息子から「父親の店を自分たちが引き継ぎたいから、事故物件価格ではなく、正規の料金でいいので買いたい」と言われたため、内心「しまった！」と思っていたらしい。もっとも、そう言われたからといって、リャオジエに対して「お前の父親に売るのをやめた」とは言えるはずはない。そこで老獺な老狐狸が取った戦法とは？

根が善良なタイライは、リイ夫妻の弱みにつけ込んで安く買うのは信義に反すると考え、リイ夫妻の息子に家を買う権利を“譲る”と宣言したが、まさか、自分の父親が目の前にぶら下がっている幸運を自ら手放すとは！そんなバカな！老狐狸から勝ち組 vs 負け組の二分法を教わり、11歳にして今やそれがすっかり身についたリャオジエは「お父さんなんか、大嫌いだ！」と叫び、家を飛び出していくことに。さあ、店舗付き住宅を買う夢を失い、父子関係もこじれてしまった、この2人の行方は？

■少年は何を学んだの？11歳の選択は如何に？■

私の小学5年生当時は、今のようなスマホはないから、情報やエンタメの源泉はもっぱらラジオだった。もちろん、両親や学校から教えられたことはいっぱいあったが、小学5年生当時の少年が学ぶ場が、そこ以外の意外なところにあったのは当然だ。そう考えると、11歳のリャオジエが父親のタイライからではなく、老狐狸のシャ社長から学んだことは、コトの良し悪しは別として大きかったようだ。老狐狸からいろいろと教わったリャオジエが、

- ① “きれいなお姉さん”から得た、ある情報を、あるところで伝える姿
- ② 老狐狸から聞いた、いじめっこの母親に関するある情報を、ある形で伝える姿

③事故物件になったリイ夫妻の店舗付き住宅の値段が下がったことを知ったリャオジェが、老狐狸にその購入を申し込む姿

を見てみると、ある意味では「子供のクセに！何と嫌なヤツ！」と思える面もあるが、そのたくましさは高く評価されるべきだ。そして、それは善良な（ばかりの？）父親タイライが全く備えていない能力なのだ。このように老狐狸から多くのことを学んだ 11 歳の少年リャオジェにとって、せっかく買えることになった店舗付き住宅を、自殺したリイの息子に譲ってしまう父親の姿（価値観）が理解できなかったのは当然だ。しかし、本作の結末は如何に？

そんな興味を持って本作を見てみると、ラストは家を飛び出し、公園で一人ベンチに座っているリャオジェの下にいじめっこの母親がやってきて、思いがけず息子に本当のことを言わないでくれて「ありがとう」と言葉をかけてくるシークエンスになる。これは一体ナニ？リャオジェはこのいじめっこの母親をギャフンと言わせたはずではなかったの・・・？

本作のパンフレットには、川本三郎氏（評論家）の『反面教師としての“ぼくの伯父さん”』があり、そこでは本作のそんなラストに触れながら、「この時、“ぼくの伯父さん”は、反面教師になるだろう。リャオジェは「他人を思いやる」ことの大切さを学んだことだろう。」と結んでいる。私はこの結論に全面的に同意するわけではないが、11 歳の少年リャオジェが老狐狸から何を学び、11 歳の選択がどうだったのかについては大いに興味がある。それについての、あなたの感想は如何に？

2024（令和 6）年 6 月 28 日記